れ、引きつづき平和祈念公園の中央広場に設けられた追悼式会場において、午前１１時５０分「沖縄戦終結５０周年記念沖縄全戦没者追悼式」が挙行され、式典においてこれまでの「平和宣言」に代わり、去る２月に沖縄県議会において採択された「非核・平和沖縄県宣言」が大田知事により宣言された。参列者も村山内閣総理大臣をはじめ、土井衆議院議長、原参議院議長、草場最高裁判所長官の三権の長、並びにモンデール駐日米国大使他多数の政府関係者、各都道府県関係者、各種団体等関係者の参列があり、県内外の遺族の方々や関係者の参列を含め約８千名の参列者により、戦没者のみ霊を慰め、世界の恒久平和を祈念した。

資　料　　追　悼　式　執　行　状　況

執行日	執　行　場　所	備　　考
昭27. 8.19	琉球大学広場	厚生省引揚援護庁長官　木村忠一郎 牛島司令官夫人、大田少将夫人
28. 9. 2	那覇高等学校校庭	田辺繁雄引揚援護局長
29.11. 7	〃	石井南方連絡事務局長
30.11.15	琉球大学広場	石井南方連絡事務局長
33. 1.25	識名霊園・ 戦没者中央納骨所	総理府総務副長官　藤原　節夫
37.11.25	琉球大学体育館	総理府総務長官　徳安　実蔵
39. 6.22	摩文仁丘広場（糸満市）	藤田南連那覇事務所長
40. 6.23	〃	総理府賞勲局長　岩倉　規夫
41. 6.23	〃	総理府総務副局長　古屋　亨 衆議院議長　山口喜久一郎
42. 6.23	〃	総理府総務副長官　堀　秀夫

執行日	執行場所	備考
43. 6.23	〃	総理府総務副長官　弘津　恭輔
44. 6.23	〃	総理府総務副長官　鯨岡　兵輔
45. 6.23	〃	総理府総務長官　山中　貞則 衆議院議長　船田　中
46. 6.23	〃	総理府総務長官　湊　徹郎 衆議院議長　船田　中
47. 6.23	〃	沖縄開発事務次官　岡部　秀一
48. 6.23	〃	政府及び国会関係者の参列なし
49. 6.23	平和祈念公園広場(摩文仁)	沖縄開発事務次官　加藤　恭守
50. 6.23	〃	総理府総務長官　植木　光教
51. 6.23	〃	総理府総務長官　植木　光教
52. 6.23	〃	沖縄開発庁長官　藤田　正明
53. 6.23	〃	沖縄開発事務次官　井上　幸夫
54. 6.23	〃	沖縄開発事務次官　井上　幸夫
55. 6.23	〃	沖縄開発事務次官　川村　皓章
56. 6.23	〃	沖縄開発事務次官　亀谷　禮二
57. 6.23	〃	沖縄開発事務次官　小玉　正任 参議院議長　徳永　正利
58. 6.23	〃	参議院議長　徳永　正利
59. 6.23	〃	沖縄開発政務次官　大城　眞順 沖縄北方対策委員長　板垣　正
60. 6.23	〃	沖縄開発政務次官　大城　眞順

執行日	執行場所	備考
61. 6.23	〃	沖縄開発政務次官　板垣　正 衆議院事務総長　弥富啓之助
62. 6.23	〃	沖縄開発政務次官　柳川　覚治
63. 6.23	〃	沖縄開発庁長官　粕谷　茂
平元. 6.23	〃	沖縄開発庁長官　井上　吉夫
2. 6.23	〃	内閣総理大臣　海部　俊樹 衆議院議長　櫻内　義雄
3. 6.23	〃	沖縄開発庁長官　谷　洋一
4. 6.23	〃	沖縄開発庁長官　伊江　朝雄
5. 6.23	〃	沖縄開発庁長官　北　修二
6. 6.23	〃	沖縄開発庁長官　佐藤　守良
7. 6.23	〃	内閣総理大臣　村山　富市 衆議院議長　土井たか子 参議院議長　原　文兵衛 最高裁長官　草場　良八

資　料

平和宣言

平和は、人類普遍の念願であり、崇高な理想である。しかるが故に２５００年の昔釈迦出でて慈悲を説き、孔子出でて仁を説き、２０００年の昔キリスト出でて博愛を説いた。

しかるに物欲に執着した国々の指導者達は、幾度か戦争を繰り返し、遂に一瞬にして幾万人の人々の尊い生命を奪い、幾多の人々を戦傷後遺症のため、生ける屍にした悪逆無道の兵器さえ使用して、第二次世界大戦を終了させ、人類史上に一大汚点を残した。

我々の愛する郷土沖縄は、この第二次世界大戦末期の激戦地となり、文字通り阿鼻叫喚の地獄絵を現出し、持てる物のすべてと、愛する肉親の多くを失った。

かつて我々の祖先が平和愛好の民として、南方諸民族との交流を図り、常に進取の気性をもって築き上げた独特、貴重な文化財をもことごとく破壊され、焼失した。

その上、我々の苦難の体験からほとばしり出た血の叫びである平和への念願をよそに安全保障の名のもとに、今なお膨大な軍事基地が存在し、それは本県の産業開発をはじめ、県民生活全般にわたり、幾多の障害をもたらし、県民に不安を与えている。

ここに我々は、第二次世界大戦において戦没されたみ霊の３３年目の追悼式をおごそかに執り行うに当たり、３２年前の県民とみ霊の苦難に思いをいたし、あらためて、「言語に絶する悲哀を人類に与えた戦争の惨害から将来の世代を救い」、「寛容を実行し、善良な隣人として互いに平和に生活し、国際の平和及び安全を維持するために、われらの力を合わす」との国際連合の精神に基づき、且つは「再び戦争の惨禍が起こらないようにすること」の決意を憲法で明確にした日本国民として、力強く全人類に平和の尊さを訴え、郷土をして世界平和のメッカたらしめんことを高らかに宣言するものである。

昭和５２年６月２３日

沖縄県知事　平 良 幸 市

平 和 宣 言

戦争は人類にとって最大の悲劇である。し烈な戦禍がこの小さな島を覆いつくし、９０日の長期にわたる鉄の暴風は、２０万余の生命を奪い、文化遺産をことごとく破壊した。あれから３４年、戦争の悲惨さを身をもって体験したわれわれ沖縄県民は、世界の恒久平和の実現を訴え続けてきた。しかるに、世界の現状は、われわれの訴えにもかかわらず、軍備の拡大競争や、国際間の紛争は絶えず、いまなお地球上から戦争の影をぬぐい去ることはできない。いまさらながら世界平和の維持の困難さを思い知らされると同時に誠に遺憾にたえない。いまこそわれわれは、全人類の英知を結集し、戦争の放棄と世界の恒久平和確立のため、総力をあげてまい進しなければならない。

ここに沖縄全戦没者追悼式並びに平和祈念式に当たり、戦没者のごめい福をお祈りするとともに、決意を新たにして世界平和のため努力することを宣言する。

昭和５４年６月２３日

沖縄県知事　西 銘 順 治

平 和 宣 言

「平和」 —— それは人間にとって崇高至純な願望である。
それにもかかわらず、人間は戦争の愚を繰り返してきた。
しかも、現在では、人類を消滅せしめる究極兵器を開発した。
このまま推移すれば、ついに人類は地上から消える。

戦争のあと、人間は常に反省と平和への誓いを新たにしてきた。
それが、時とともに忘れ去られて行く。
平和の中の安逸におぼれたとき、戦争への反省も教訓も風化現象を起こす。
だからこそ、平和なときに、平和への行動を起こさねばならない。

我々沖縄県民は戦争を体験した。
この島で実際に戦闘が行われ、肉親、同胞をはじめ、実に多くの人々の死を見た。その上、我々の祖先が一千年にわたり営々として築き上げた文化遺産は、そのほとんどが灰燼に帰した。これは、戦後４６年経った今でも、昨日の出来事のようによみがえるのである。

世界はいま、冷戦の時代が終わり、東西融和へ歩み始めたが、一方、民族紛争の多発、とりわけ湾岸戦争は、戦争への気運がいとも簡単に醸成されていくさまを見せつけた。沖縄の軍事基地が、それらの状況と連動していることも事実である。

我々は、真摯に平和を追求するとともに、平和を脅かすものへの警戒も怠ってはならない。戦争になってから、平和を叫んでも、遅過ぎるのだ。

新しい時代が来る。２１世紀である。２１世紀の主役は戦争を知らない世代である。
我々は、この若い世代へ平和の理念と行動をしっかりと継承させなければならない。

夏６月、ここ沖縄から世界の人々へ呼びかける。

いかなる理由をもってしても
戦争を正当化することはできない。

我々は、歴史の教訓に学び、英知を結集し、平和の創造に努力する。

右　宣言する。

平成３年６月２３日

沖縄県知事　大田昌秀

非核・平和沖縄県宣言

戦争は　無差別に破壊し尽くす
全ての生命を
生活を
文化を
歴史を
自然を

太平洋戦争最後の地上戦があった
この地　沖縄
街や村が焼かれ
二十万余が命を奪われた
祖先が築き上げた文化遺産は失われ
地形をも変えた
その傷跡は　今なお癒えない

戦争　その悲惨な体験をいしずえとして
私たちは
世界の人びとへ訴える
一切の核兵器と
あらゆる戦争をなくし
武器にかえて対話を
そして　愛と信頼で
地球を　平和に満ちたみどりの星にしよう

私たち沖縄県民は
「イチャリバチョーデー」を合言葉に

万国津梁の地の建設を希求し
世界の恒久平和を願い
声高らかに　非核・平和沖縄県を宣言する。

平成７年６月２３日　沖縄県

(3) 海外の慰霊

ア. 南洋群島県出身戦没者慰霊墓参

北マリアナ連邦は１９１４年（大正３年）第一次世界大戦の最中、日本海軍が無血占領し、１９２０年国際連盟の決議によりカロリン、マーシャル両諸島と共に日本の委任統治となった。

戦前旧南洋群島には、在留邦人の８０％を占める約６万人余の沖縄県出身者が在留していたといわれるが、大正９年以来築きあげてきた南洋群島の平和の楽園は、第二次世界大戦の勃発によりたちまち地獄の島と化し、軍属及び民間人あわせ１万２千余人が戦没したところである。

これらの戦没者のみ霊を弔うため、沖縄外地引揚者協会からの強い要望もあり、琉球政府は再三にわたり、米国民政府に陳情を繰りかえし、戦後２３年目の昭和４３年６月にサイパン島南部の町、ススペの墓碑地帯に台石を合わせて３メートル余りもある石碑「おきなわの塔」を建立し、６日に除幕式典と慰霊祭を挙行した。この慰霊祭には沖縄からの墓参団５０人をはじめサイパン市当局、及び沖縄の人たちに特別に好意をよせている現地の人たち多数が参加し盛大に行われ、沖縄から持参した泡盛や黒砂糖を供え遺族の方々は肉親の霊を弔った。

昭和４３年６月にススペに建立された「おきなわの塔」は、その後現地の都市計画の関係で昭和４９年８月にサイパン島マッピー、メモリアル公園内に移転し、霊域としての尊厳を保持するため、現地のベナペンテコパニーに造園工事を請け負わせ昭和５０年１２月３１日に完成した。

その後、平成４年度には南洋群島帰還者会に対し、補助金を交付し「おきなわの塔」の改修を行った。南洋群島慰霊墓参は、昭和４３年と昭和４５年に実施され、その後、昭和４７年度からは毎年慰霊祭を執行している。

又、墓参団は、サイパン在の「おきなわの塔」で慰霊祭を終了後、テニアン島、パラオ島、ロタ島とそれぞれの島々で関係遺族により戦没者の慰霊祭が執り行なわれている。

昭和５１年は３３回忌にあたり２７６名の多数の遺族が参加した。昭和５５年からは南洋群島帰還者会が協力して実施しており、昭和５６年の慰霊祭には西銘知事が参列し戦没者のみ霊のご冥福を祈念した。

戦後４０年の節目にあたる昭和６０年は、県代表として嶺井副知事はじめ、遺族とともに南洋群島帰還者会が中心となり記録取材をかね、戦争体験の継承に力を入れること、さらに現地の旧日本人学校の同窓生が旧校舎跡の訪問計画や、現地でのサイパン会の現地総会を開催するという取り組みもあり２３１名の慰霊墓参団となり、翌年の昭和６１年も３１５名もの多数の関係者が慰霊参拝し、み霊を弔うとともに恒久平和を祈念した。

南洋群島での戦闘終結５０周年を迎えた平成６年度南洋群島慰霊墓参には２８８名が参加し「おきなわの塔」における慰霊祭には北マリアナ連邦政府知事、上、下両院議長、観光局長及びサイパン在日本領事他現地の方々約５０名が参列しみ霊を弔うとともに、各島での慰霊祭はじめ現地の方々との交流を深めてきた。

南洋群島帰還者会においては、南洋群島出身戦没者慰霊墓参への協力をはじめ、現地の子弟への支援並びに現地の方々との交流についても尽力されている。

サイパンの「おきなわの塔」の霊域管理については、マリアナ行政観光局長と霊域管理委託契約を締結し、毎年、慰霊墓参の時期に契約更新をし霊域管理に努めている。

資　料　　南　洋　墓　参　状　況

回 ＼ 参加者別 ／ 年月日		県代表	議会代表	遺族代表	その他	計
第１回	昭和４３年 5月31日～ 6月 7日	2	0	38	10	50
第２回	昭和４５年 10月13日～10月27日	2	0	15	1	18
第３回	昭和４７年 9月26日～10月 3日	3	1	10	1	15
第４回	昭和４８年 8月13日～ 8月19日	1	0	10	1	12
第５回	昭和４９年 8月21日～ 8月27日	4	2	40	3	49
第６回	昭和５０年 10月30日～11月 5日	4	0	26	1	31
第７回	昭和５１年 8月13日～ 8月19日	4	0	265	7	276
第８回	昭和５２年 9月16日～ 9月23日	2	0	26	3	31
第９回	昭和５３年 7月 7日～ 7月12日	2	0	12	2	16
第10回	昭和５４年 8月13日～ 8月20日	2	0	26	3	31
第11回	昭和５５年 5月12日～ 5月17日	2	0	126	24	152
第12回	昭和５６年 6月28日～ 7月 4日	8	0	88	33	129

第13回	昭和５７年 6月 1日～ 6月 8日	2	0	134	0	136
第14回	昭和５８年 7月 4日～ 7月 9日	2	0	42	0	44
第15回	昭和５９年 6月 4日～ 6月 9日	2	0	58	0	60
第16回	昭和６０年 5月21日～ 5月28日	3	0	226	2	231
第17回	昭和６１年 5月27日～ 5月31日	2	0	301	12	315
第18回	昭和６２年 5月27日～ 6月 1日	2	0	167	0	169
第19回	昭和６３年 5月31日～ 6月 5日	1		240	0	241
第20回	平成元年 6月 6日～ 6月12日	1		174	0	175
第21回	平成２年 6月 1日～ 6月 8日	2		163	0	165
第22回	平成３年 6月 3日～ 6月 9日	2		200	0	202
第23回	平成４年 6月 1日～ 6月 7日	2		227	0	229
第24回	平成５年 6月 1日～ 6月 7日	2		118	0	120
第25回	平成６年 6月 1日～ 6月 7日	2		286	0	288
第26回	平成７年 5月29日～ 6月 5日	2		153	0	155

イ．フィリピン群島県出身戦没者慰霊墓参

フィリピン群島は、明治３６年ベンゲット道路建設要員として日本から多数の技術者等が参加して完成しており、沖縄からも多数参加していた。道路工事完成後、沖縄出身者の中にはミンダナオ島に渡り、山林を開墾し麻栽培を始め、それ以後沖縄から多くの移民が農業、漁業、商業等に従事し生活の基盤を築いていた。

ミンダナオ島ダバオには在留邦人の約７割を占める沖縄県人約３万人が居住していたと云われる。

フィリピン群島は、今次大戦で多くの日本軍が派遣され、各島々で激戦が展開され、移民で活躍していた沖縄県人も、応召のほか戦闘協力によって１万２千余人の老若男女が戦没したところである。

そこで、フィリピン群島において戦没者のみ霊を祀る慰霊塔を建立するため、昭和４３年１０月に沖縄外地引揚者協会とともに琉球政府は現地調査を行った。昭和４４年９月にダバオ市の市有地であったミンダナオ島のミンタール墓地で５平方メートルを琉球政府が取得し、昭和４５年１月「沖縄の塔」を建立した。

慰霊碑「沖縄の塔」は沖縄北部の東村字有銘から採取した石を使用し、塔名の題字は屋良行政主席の揮毫によるもので、重量３５０キロ、高さ１メートル５０、幅０．８メートル、厚み０．１５メートルもある塔となっている。

「沖縄の塔」の除幕式と慰霊祭は昭和４５年１月２８日に沖縄から遺族他１４名の参列のほか、現地関係者約６０名の参列があり、厳粛に執り行われた。

フィリピン群島の慰霊墓参は昭和４８年から沖縄県、沖縄県議会、沖縄県遺族連合会の共催により、墓参団を派遣し、慰霊祭を執行してきたが、昭和５３年からは沖縄県と沖縄県遺族連合会の共催で執行するようになり、昭和５４年からダバオ会沖縄県支部が協力し共催することとなった。

平成７年度は、終戦５０周年記念の現地での慰霊祭としてダバオ会沖縄県支部の取り組みがあり、遺族他２４２名の多数の方々が参列し「沖縄の塔」において、フィリピン全地域で戦没された沖縄県出身戦没者のみ霊を慰め、終戦５０周年をむかえ世界の恒久平和を願い慰霊祭が執行された。

「沖縄の塔」の管理については、毎年度慰霊祭の折りにダバオ市長と覚書きを交

わし管理してきたが、ミンタール墓地内の日本関係者に係る全般的な清掃管理については、昭和４９年以来、外務省が日系人会に委託して管理を行っており、平成４年度から外務省の事業としてミンタール墓地周辺の整備に伴い、塀の設置、通路の整備や戦没者の氏名を刻銘した碑の建設が進められた。

このようなことから、ミンタール墓地内にある「沖縄の塔」の清掃管理委託についても平成７年度からフィリピン日系人会と管理委託を締結し管理に努めている。

資料　　フィリピン墓参状況

回 ＼ 参加者別 ／ 年月日		県代表	議会代表	遺族代表	その他	計
第１回	昭和４５年 1月24日～1月31日	1	0	7	6	14
第２回	昭和４８年 10月16日～10月22日	1	2	35	2	40
第３回	昭和４９年 10月14日～10月21日	3	2	18	1	24
第４回	昭和５０年 12月 3日～12月 8日	2	0	17	1	20
第５回	昭和５１年 9月11日～ 9月15日	2	0	71	3	76
第６回	昭和５２年 8月15日～ 8月21日	4	3	80	4	91
第７回	昭和５３年 9月 5日～ 9月10日	2	0	20	3	25
第８回	昭和５４年 7月31日～ 8月 5日	2	0	120	4	126
第９回	昭和５５年 8月 3日～ 8月 8日	2	0	121	5	128
第10回	昭和５６年 8月 6日～ 8月11日	2	0	100	7	109

第11回	昭和５７年 8月10日～ 8月15日	2	0	79	4	85
第12回	昭和５８年 8月 9日～ 8月14日	2	0	82	1	85
第13回	昭和５９年 7月31日～ 8月 5日	2	0	80	0	82
第14回	昭和６０年 8月 7日～ 8月14日	1	0	80	3	84
第15回	昭和６１年 8月28日～ 9月 2日	2	0	135	9	146
第16回	昭和６２年 9月22日～ 9月27日	1	0	68	4	73
第17回	昭和６３年 7月24日～ 7月28日	2	0	53	0	55
第18回	平成元年 7月30日～ 8月 6日	2	0	43	0	45
第19回	平成２年 8月24日～ 8月30日	2	0	63	0	65
第20回	平成３年 8月26日～ 8月31日	2	0	78	0	80
第21回	平成４年 8月18日～ 8月24日	2	0	61	2	65
第22回	平成５年 9月 8日～ 9月12日	2	0	178	5	185
第23回	平成６年 9月 1日～ 9月 6日	2	0	183	8	193
第24回	平成７年 8月15日～ 8月20日	2	0	219	21	242

ウ．中国県出身戦没者慰霊巡拝

今次大戦で中国においては、沖縄県出身の軍人、軍属、民間人あわせて１７２９人の尊い人命が失われた。

中国で戦没した沖縄県出身軍人、軍属及び開拓団員の慰霊のための中国墓参の動きが出、昭和５３年日中平和友好条約発効に伴いその機運が昂まってきた。

県においては、中国で戦没した沖縄出身戦没者の慰霊のため沖縄県遺族連合会と共催により、昭和５６年９月に第１回目の中国墓参を実施し、遺族含め１７人が参加し東北（旧満州）のチチハルと藩陽（旧奉天）で慰霊祭を執り行い、さらに天津の宿舎で「中国地区全戦没者慰霊祭」を執行した。

昭和５７年８月には、沖縄県外地引揚者協会との共催で「中国東北地区友好訪中団」に、県、沖縄県外地引揚者協会代表、沖縄県遺族連合会代表はじめ遺族含めて２５人が参加し、慰霊参拝を行い、中国政府により黒龍江省方正県に建立されている「方正地区日本人公墓」で慰霊祭を執行した。さらに、ハルビン、長春、藩陽において東北地区戦没者のみ霊を弔うためホテルの一室で慰霊祭を執行した。

昭和５９年度から、中国における「日中友好と慰霊墓参」は中国東北地区と中国華南地区の二地区に区分し実施されそのうち、東北地区での「日中友好と慰霊墓参」については昭和６０年度の実施まで沖縄県と沖縄県外地引揚者協会で執行し、中国華南地区及び昭和６１年度執行の中国東北地区における「日中友好と慰霊墓参」については、沖縄県と沖縄県遺族連合会の共催により執り行ってきた。

平成元年度は中国の国情を勘案して中止しており、平成２年度からは「日中友好と慰霊墓参」は、中国華南地区において「中国沖縄出身戦没者追悼式」を執行している。